

小学校高学年を対象としたサッカーの学習指導に関する検討

A study on teaching soccer for the upper graders of elementary school

1K05B151

指導教員

主査 吉永武史先生

徳留 華織子

副査 広瀬統一先生

小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省,2008b)では、パスやドリブル、シュートなどのボール操作技術に加えて、ボールを持たない動きについても明示された。ボール運動の授業でゲームパフォーマンスを向上させるためには、ボール操作の技術だけでなく、ボールを持たない動きについても学習しなければならない。なぜなら、ゲーム中のプレーヤーの行動の大部分が、ボールを持たない動きで占められているからである。他方で、ボールを持たない動きを含めた技術を習得するだけでゲームパフォーマンスを発揮できるわけではない。そこでは、練習で習得した技術を、「いつ」「どのような場面で」発揮するかという意思決定が重要になる。この意思決定の能力がなければ、どんなにゲームと乖離した状況で技能を高めたとしても、実際のゲーム場面でその技能を発揮することはできない。このことを踏まえれば、技術のみでなく意思決定についても学習内容として取り上げ、その習熟を保障する必要があるといえる。

そこで本研究では、小学校高学年のサッカーの授業を対象に、ゲームパフォーマンスの構成要素であるサポートならびに意思決定の学習可能性についての検証を試みた。具体的には、サポート学習を中心としたサッカーの学習指導を行い、それによって児童のゲーム中のサポート能力やパスに関する意思決定能力が高まるかどうかについて分析を行った。

研究の手続きとしては、最初に診断的授業評価を用いて被験者となる児童の実態把握を行った上で、10 時間授業で構成したサッカー単元を

展開し、形成的授業評価ならびにゲームパフォーマンス評価を用いて、児童の学習成果を確認した。そして、単元終了後には、総括的授業評価を用いて児童の体育授業に対する態度形成を確認した。その結果、以下の諸点が明らかになった。

1. 単元前後に診断的・総括的授業評価を実施した結果、情意目標、認識目標、運動目標、社会的行動目標の4観点すべてにおいて有意な高まりがみられた。特に、運動目標の「運動の有能感」や「できる自信」などの項目が有意に高まっていることから、サポート学習によってサッカーに対して苦手意識を持っていた児童たちが自信を持って運動に取り組むようになったと考えられる。
2. 毎時間形成的授業評価を実施した結果、単元進行に伴って右肩上がりに評価が高くなっていったことが確認された。単元後半の10時間目はすべての次元において単元の最高評価を記録した。「成果」次元でいえば、オリエンテーション段階では、初めて学習するサポートの動きに困惑しながら学習に取り組んでいたが、単元進行とともにサポートの動きが定着し、「成果」次元の得点を高めていったといえる。
3. ゲームにおける児童のサポートの動きを分析した結果、単元の2時間目が29.0%であったのに対し、単元の9時間目には50.6%にまで達していた。これはタスクゲームとして設定した「トライアングルパスゲーム」によって、三角形のポジショニングのイメージを児童が掴める

ようになり、実際のゲーム場面で発揮できるようになったと考えられる。また、サポート?については、単元進行に伴う増加傾向が認められることから、パッサーと自分との間にディフェンスがないスペースへうまく走り込み、パスを受けるようなサポートを児童が定着させていったといえる。

4. ゲームにおける児童の適切な意思決定について分析した結果、単元中盤には一時的な

落ち込み現象がみられるものの、単元前半の2時間目が75.9%だったのに対し、単元後半の9時間目が84.2%と約10%の伸びがみられた。単元前半は、サポート能力が高まっていないためにフリーな状態になっているターゲットが少なく、パッサーの意思決定は難しいものであったが、単元進行に伴ってサポートが定着してくると適切な意思決定の比率も上がっていったと推察される。